

# ダウン症児子育て支援「親と子の音楽あそび」の試み

石岡由紀\*・安藤忠\*\*・曾和光代\*\*

## はじめに

エミール・ジャック・ダルクローズ<sup>1), 2), 3)</sup>は、身体による音楽表現を体系化した。このような、身体をとおして音楽を感じ、また表現する方法は、リトミックと呼ばれ、障害のある子どもの音楽療法としての有用性が広く認められている<sup>4)</sup>。

のびのびと自由に、感じるまま(即興性)に身体で表現し(自己表現)伝えあう(コミュニケーション)、枠にはまらないこの方法の目的は、「心理的集中力を増大させ身体的調和を組織化し、人格を高めていくこと」であり、「神経や筋肉のアンバランスな状態を取り除き、外界との関係を正しく図り、行動の統制を身につけていくこと」にあるとされ、集団という形で実際に行うと、障害のある子どもの内的聴取力を刺激し、見事な効果を発揮する。

私たちは、これまで、2003年4月以来、リトミックを主にした音楽あそびを、まず神戸親和女子大学で、次に親和保育園で、計34組のダウン母子に対し、共にいわゆる「地域子育て支援事業」の一環として提供してきたので、その内容等に関して本稿を介して報告する。

## 講座の概要

### 1. 参加者の概要(2004年12月1日現在)

本講座に参加しているのは就学前のダウン症児とその保護者で、神戸親和女子大学開催16組、親和保育園開催18組の計34組である。

#### ① 性別と年齢

男児19名、女児15名の計34組で、最年少児は2歳2ヶ月、最年長児は6歳7ヶ月である。そのうちわけは表1、2に示したとおりである。

表1 対象幼児の性別

	神戸親和女子大学	親和保育園	計
男児	10	9	19
女児	6	9	15
計	16	18	34

表2 対象幼児の年齢

年齢	神戸親和女子大学	親和保育園	計
2:1~2:5	0	1	1
2:6~3:0	0	0	0
3:1~3:5	1	1	2
3:6~4:0	4	3	7
4:1~4:5	3	2	5
4:6~5:0	5	3	8
5:1~5:5	0	4	4
5:6~6:0	0	3	3
6:1~6:5	3	0	3
6:6~	0	1	1
計	16	18	34

#### ② 就園先

主な就園先としては、公立保育所、私立保育園、公立幼稚園、私立幼稚園、通園施設である。そのうちわけは表3に示したとおりである。

表3 就園先

年齢	保育所/園	通園施設	幼稚園	未就園
2:1~2:5	0	0	0	1
2:6~3:0	0	0	0	0
3:1~3:5	1	1	0	0
3:6~4:0	6	1	0	0
4:1~4:5	6	0	0	0
4:6~5:0	5	2	0	0
5:1~5:5	2	0	2	0
5:6~6:0	2	0	1	0
6:1~6:5	3	0	0	0
6:6~	1	0	0	0
計	26	4	3	1

\*本学助教授

\*\*本学教授

## 2. プログラムの概要 (10:30~12:00)

音楽講師による手遊び、うた遊び、楽器遊び、リトミックを中心にした活動および、学生ボランティアによる絵本、ゲーム活動、音楽講師によるピアノ演奏、また必要に応じてグループカウンセリングもしくは個別カウンセリングを行っている。

### ① 自由遊び (10:30~10:50)

サーキット用遊具 (Fig. 1)、ボール、フープなど保護者や学生ボランティアとともに好きな遊びに取り組むことにより、おとなや他児との信頼関係を高めるとともに、選択能力や自発性を高める。

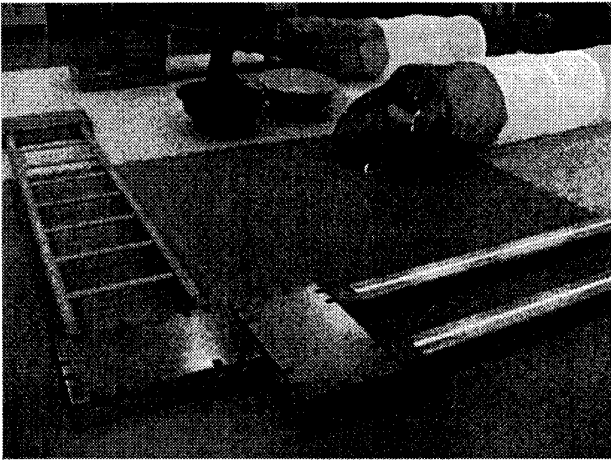


Fig. 1 サーキット用遊具

### ② 手遊び、うた遊び (11:50~11:10)

「さあみんなが集まった」全員がそろった頃を見計らって演奏される。この曲が演奏されるとプログラムが始まるということを知る (Fig. 2)。



Fig. 2 プログラムの開始「さあみんなが集まった」

「おはようのうた」手、足を使ったリズム遊び

であるが、こそばし、握手などを入れることにより、親子のスキンシップをはかる (Fig. 3)。



Fig. 3 「おはようのうた」

「なまえよびのうた」大勢の中で自分の名まえを呼ばれたら手をあげて返事をするという活動から参加する意欲を高めること、またいつ自分の名まえが呼ばれるか期待して待つことにより、集中力を高める (Fig. 4)。



Fig. 4 「なまえよびのうた」

「ゲーチャキパー」手先および指先を使う手遊びであり、くり返すことによって記憶力をつけるとともに、講師の模倣をすることで集中力を高める (Fig. 5)。



Fig. 5 手あそび 「ぐーちょきぱー」

「きりんさん」リズムに乗ってからだをスイングしたり、動作をすることにより、楽しみながらリズム感を身につける (Fig. 6)。



Fig. 6 うたあそび「きりんさん」

「おうまはみんな」保護者のひざの上で上下のゆれや、左右のスイングなどからだを動かすことでスキンシップを高めるとともに楽しみながらリズム感を身につける (Fig. 7)。



Fig. 7 うたあそび 「おうまはみんな」

「ラッコのおやこ」曲に合わせて抱っこ、おんぶ、横抱きにしてからだを動かすことにより、親子のスキンシップをする中で楽しみながら簡単な感覚統合的動作を経験する (Fig. 8)。

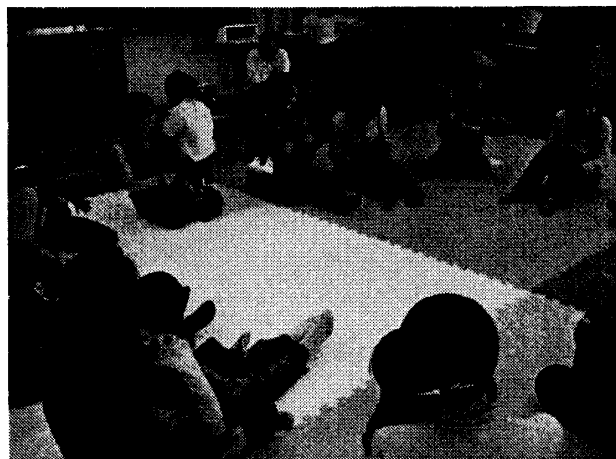


Fig. 8 うたあそび 「らっこのおやこ」

### ③ 楽器遊び(11:10~11:20)

大太鼓、小太鼓、カスタネット、タンブリンなどを使って「おもちゃのチャチャチャ」「アイアイ」の曲に合わせてリズムを打つ (Fig. 9) ことにより、楽しみながらリズム感や集中力を身につける。



Fig. 9 楽器あそび

### ④ リトミック (11:20~11:35)

「歩く／4分の4拍子」「走る」「ゆっくり歩く」「ジャンプ」を曲に合わせて行った後、ピアノが止まったら静止することや逆周りをすることを繰り返すことにより、楽しみながらリズム感や集中力を身につける (Fig. 10)。また「世界中の子どもたちが」の曲に合わせてフォークダンスを行う

ことにより、集団で遊ぶことの楽しさを知るとともに記憶力や粗大運動能力を高める。



Fig.10 リトミック

#### ⑤ その他の遊び (11:35~11:50)

①~④までのルーティンワークにかわり、月毎に変わる遊びを設定する (Fig. 11) ことにより、新しい課題に取り組むための提示の仕方を保護者に伝える。



Fig.11 感覚あそび

#### ⑥ 終わりの会(11:50~12:00)

学生ボランティアによる絵本の読み聞かせ (Fig.12)、



Fig.12 絵本の読み聞かせ

ピアノ講師によるピアノ演奏または独唱を鑑賞、参加シールをはる (Fig.13)。



Fig.13 シールはり

この一連の流れを経験することで終わりの時間 came きたことを自ら知る手がかりとする。

### 3. 保護者へのアンケート調査の結果 (自由記述)

#### ①手遊びうた遊びについて

- ・ 今から始まるということがわかって取り組みやすそうである。
- ・ 知っていることができるので、スムーズに参加できている。
- ・ くり返すことによってしっかり (正しく) できるようになった。
- ・ 次に何があるのかわかるようになったので期待して待てるようになった。
- ・ 子どもたちに負担がない内容なので楽しく取り組んでいる。
- ・ 家でも自分からやるようになった。

- ・ 自分だけでなく、他児の名まえも覚えるようになった。
- ・ 参加人数が多いので名まえよびに時間がかかる。

#### ②楽器あそび

- ・ 家にはないいろいろな楽器を使うことができる。
- ・ 今まで興味を示さなかったおもちゃの楽器を使うようになった。
- ・ もう少しリズムにあわせて楽器を使うようになってほしい。
- ・ 他の楽器も使わせてほしい。
- ・ 楽器の音色を楽しむような課題にしてほしい。

#### ③絵本の読み聞かせ

- ・ 昔話や童話を取り入れて欲しい。
- ・ 短い文章の絵本を選んで欲しい。
- ・ 子どもが参加できる絵本を選んで欲しい。
- ・ 興味はあるようだが、集中して聞くことはまだ難しいようである。
- ・ 真剣に聞いている。
- ・ 子どもたちは真剣に聞いているのに対して母親の私語が気になる。
- ・ 絵本よりも紙芝居や人形劇の方が興味を持って聞くことができる。

#### ④ピアノ演奏／独唱

- ・ 生の演奏や独唱を聴く機会があまりないので良い機会だと思う。
- ・ 聴いているとゆったりした気持ちになれる。
- ・ 子どもたちが真剣に聞いている姿に驚いている。
- ・ クラシック音楽をライブで聴く機会などめったにないので楽しみにしている。

#### ⑤その他（感想／要望等）

- ・ 年齢差があるので、年長児には少々もの足りない感じがする。
- ・ パラバルーンを使った遊びを取り入れて欲しい。
- ・ サーキット遊びを取り入れて欲しい。
- ・ 気候の良い時期には外遊びを取り入れてほ

しい。

- ・ 楽譜が欲しい。
- ・ 絵画や折り紙を取り入れて欲しい。
- ・ 「できるようになった」という実感が欲しい。
- ・ 月に1度なので、1度欠席すると少々間があきすぎるように思う。
- ・ 相談時間をとってほしい。

#### 4. 現状と今後の課題

本講座は、同じ遊びを繰り返して行うことによって、その楽しさを知りまた楽しい遊びを通して、運動面の発達を促すこと、さらにその遊びを通して保護者や保育者とのコミュニケーションの幅を広げることが自然に身につけていく過程を保護者自ら経験しその大切さを実感していただくことを一つの目的にしている。毎回2時間のうちの半分以上が前回と同じ遊びを繰り返すというプログラムについて最初は「もっと違った遊びを教えてほしい」とか「内容が幼すぎるのではないか」との意見も聞かれたが、発達に遅れのある子どもの多くは、見通しをたてることが苦手である。また新しい遊びを覚えたり、その内容を理解することにも困難が伴うことはよく知られていることである。保育所／園や幼稚園での遊びは、実に豊富で多くの子どもにとって興味関心が向くように工夫されている。しかし発達に遅れを持つ子どもにとってじっくり楽しむというまもなく次の遊びへ展開するということが多いようにも思われる。そこで彼らはその経験を通して集団の遊びそのものを敬遠してしまうという現状が見られるのではないだろうか。本講座で展開しているように同じ遊びを繰り返すことは、①見通しを持って参加することができる②知っているあそびなので安心して参加することができる③できたという達成感を味わうことができるなどのメリットが考えられる。保育所／園や幼稚園での集団生活を体験することは彼らにとって重要なことであるのはいうまでもない。しかしその他の場所として彼らが安心して充実感を味わう場の設定も必要であると考えられる。

また本講座の対象年齢は2歳2ヶ月から6歳7ヶ月と、就学前の幼児にとっては比較的幅広い年齢の集団構成になっている。したがって子どもの興味関心にも多少のばらつきが見られるのであるが、年少児の保護者にとってあと数ヶ月するとあのようなことができるとかあのようなことが楽しめるようになるということがわかり、育児の目安ができ、しかも同じ立場にある保護者の経験談を聞けるグループカウンセリングのような形態がもてることは非常に有意義なことであろう。

その一方で、本講座は就学前の幼児を対象としているため、就学を向かえた子どもは本講座を卒業することとなる。上記したように同じような年齢の子どもや悩みを持つ保護者同士の自助グループの場として、または本講座の開催者である著者らによるコンサルテーションの実施など月に1回の講座ではあるが、子どもと保護者にとって一つの居場所となっていたことは事実であろう。今後は就学を迎えた子どもたちに対する居場所作りを構築する必要性が急務であると思われる。

#### 参考文献

- 1) E・J・ダルクローズ(板野平訳)『リズム音楽』全音楽譜出版社 1970年
- 2) E・J・ダルクローズ(板野平訳)『リズムと音楽と教育』全音楽譜出版社 1975年
- 3) E・J・ダルクローズ(板野平訳)『リトミック・芸術と音楽』全音楽譜出版社 1986年
- 4) 川崎多美子・安藤忠「リトミックによる発達援助の実際」『発達障害児教育』第337号 PP11～13 2001年
- 5) 安藤忠『新版ダウン症児の育ち方・育て方』学研 2002年
- 6) 藤田弘子『ダウン症児の赤ちゃん体操』メディカ出版 2000年
- 7) 福尾野歩他『あそびのメソッドシリーズあそび名人12人』クレヨンハウス 2003年
- 8) 堀正嗣『障害児教育のパラダイム転換』柘植書房 1994年
- 9) ケロボンズ『うたっておそぼうケロボンズ』ひか

りのくに 2002年

- 10) マリア・モンテッソーリ『幼児と家庭』エンデルレ書店 1965年
- 11) 中川ひろたか『あそびソングブック』ひかりのくに 2000年
- 12) 新沢としひこ『新沢としひこのあそびうただいすき』すずき出版 1996年
- 13) 新沢としひこ『新沢としひこのふれあいあそび』すずき出版 2003年

(本研究は、平成15年度 神戸親和女子大学「第3種共同研究費」の助成を受けたものである。)